

皆様こんにちは。これから正信偈講座ということで、皆様とご一緒に聴聞させていただくことを大変有り難く思います。それでは今日学ばせていただきますところを、皆様方とご一緒に拝読させていただきたいと思います。お手元のテキストの九頁ですね。終わりから四行目の「摂取心光常照護」から、一〇頁の「雲霧之下明無闇」というところまで、学ばせていただきたいと思います。ゆっくり拝読したいと思いますので、皆様方もお声をお出しくださいませ、お願い致します。

摂取心光常照護 已能雖破無明闇

摂め取って捨てないみ仏の光は、
常に私たちを照らし護ってくださいます。
すでに無明の闇は破られているといっても、

貪愛瞋憎之雲霧 常覆真實信心天

私たちのむさぼり、執着し、怒り憎しむ雲や霧が、
常にみ仏の真實の心を覆（おお）ってしまいます。

譬如日光覆雲霧 雲霧之下明無闇

たとえば、日光が雲や霧に覆われても、
その下は、明るく闇がないように、
み仏の心は私たちの闇をつつんでいます。

どうもありがとうございました。大変感銘の深い一段であります。もう三月になりまして、寒い中にも春の日差しを感じることでございます。

先程ご住職様とお話をしたのですが、今日は三月十一日でございます。二〇一一年の三月十一日は、東日本大震災でたくさんの方々が犠牲になりました。未だに避難しておられる方々、仮設住宅に住んでおられる方々がたくさんおられます。そういう方々のことを忘れることはできません。

東日本大震災は、天災であると同時に人災という。それは免れません。福島原発。これは放射線の汚染という、人間が作ったものでありますから、人間が良かれと思って作ったものは、人間自身の命、あるいは生活を危うくする、そういう人間世界の現実ということが照らし出されておるような、そういう事件でございます。

それから一九四五年、昭和一〇年三月十日は、東京大空襲がありました。特に B2 9 が三四四機、この空を覆って、死者が十万人以上出たと。焼失家屋は二万户以上。都内の四〇%が焼け野原になるという、大変悲惨な出来事がありました。これもやはり人災であります。

私はこの「業道流転」の人間の歴史ということを考えさせられるのであります。業道ということは、人間の歩む道。流転というのは生死流転ということでありまして。迷いの生、迷いの死の中に飲み込まれて、滔々（とうとう）として流れてきたと。これはもう日本の歴史位のことではなくて、人類の歴史始まって已来の流転の歴史があるということです。私たち日本国もその歴史を受けている。そういう業道流転の歴史の中に私たちが生をいただいているのだなということを、つくづくと思わせられるのでございます。

そういう中で、私たちが仏法に会う時に教えられます、「死の縁は無量」。人間の命をいただいて生きるものの姿ですね。死の縁というのは無量であると。量り知れない。そして「死の因は生」で

ある。生まれたということである。

これは常識的に考えると、交通事故で死んだとか、震災で死んだとか。確かに事の縁はそれに違いないのでありますけれども。生まれたということがもう既に死ということを決定しているということでございます。この東京も太平洋戦争の前には大正の大震災がありました。

つい先達ての朝日新聞の夕刊ですが、あの津波がもし銀座だったらという記事が載っております。ソニービルの四階のところ、水の高さが16.7mのちょうどこの高さだということ。それに対しましてもこの辺も水の底だと。

私は市川の大分奥のほうに住んでおりますが、やっぱり水の底になるということでもあります。そういうことを忘れておりますけれども。やっぱり人間の生活それ自身に警鐘を鳴らしておる。警鐘は、いつも鳴らされているのですけれどもね、あんまり耳を傾けないのですよね。

戦後七十二年にね、本当におっかない政治家の方々がいらっしゃいまして、こんなにも早く痛みの歴史が風化していくということは、やっぱり人間の業というのは中々迷いの深いものだなあと。業道流転の歴史というのは本当に深いものであると、そういうことを知らされます。

私たちが教えに出遇って、一人ひとりいただいた人生に真向かっていくことはですね、流転の中に終わらない人生を見出していかずにおれないという人間一人ひとりの中に深く萌している、本当の願いであると思います。それは私たちの上に起こる願いであるけれども、その願いがあまりにも深く、あらゆる人々を貫いておるが故に、その深い願いを如来の本願、仏の大悲の願として表現してくださった。そういう願いが、私たち一人ひとりの命に息衝いているのであるということをお教えられることでもあります。

真宗門徒という大変恵まれた生き様ということをお教えていただいております。これはやはり遇い難くして遇った、生まれ難くして生まれた人生は、一人ひとりの人生でありまして。そのかけがえのない人生に悔いを残すことなく生きることができる。そうして命終わっていくことができる。そういう人生が願われておる。

親鸞聖人が九十年のご生涯をかけて根本の聖教であります『教行信証』を表してくださったということも、本当に遇い難くして真実の仏法に出遇うことのできたという。本当に深い喜び、感動を、親鸞聖人ご自身が何よりも深くいただかれておる。それと同時に、十方三世のあらゆる人々と共に、いただいきたいと。そういう深い志願がある。

私は親鸞聖人の表わされた聖教、和讃、そういったものいただきますと、そこに親鸞聖人の粉骨砕身の、身を粉にしても、骨を砕いてもという。如来大悲の恩徳に報ぜずにはおられない。「恩徳讃」ですね。親鸞聖人はその「恩徳讃」を、さながら生きられた方。そこには阿弥陀の因位である法蔵菩薩のご苦勞ということをお深くいただいくということが、根本の動機としておありになるのであります。

その法蔵の願心に生きられた親鸞聖人は、まさに法蔵菩薩のごとく生きられたという。そう思わずにはおれません。曾我先生に遇い難くして遇われた津曲淳三さんという方は、曾我先生に出遇われた喜びの中で、「曾我先生は、まさに生きた法蔵菩薩である」という、讃嘆の言葉をおっしゃられました。私は決してそれは大袈裟な誇大な表現ではなくして、本当に実感のある言葉だと思いますね。

それは何故かと申しますならば、もしこの人に遇わなかったら、自分の人生は空しく終わったであろうという、そういう感動、感銘が込められているのであります。私たちは今、親鸞聖人がお作りくださいました「正信偈」をいただくということにおいて、やはり親鸞聖人のご苦勞をいただく。親鸞聖人にして、親鸞聖人たらしめておる、因位、法蔵のご苦勞、発願。そういったものを、私たちの生活の上にいただいくと。そしてお互いにあそしれないこの身であると言わなければなら

ないと思います。

今日只今ただ生きておる人生。自分自身に本当に出遇っていくということが願われている。このいただいた命はですね、並々ならない命の尊い歴史、歩みをいただいて。生きとし生けるものの中の一人として、生かされて生きておるのであるということ、しっかりと見出していくということが願われていると思います。

今日は先程拝読致しました、「正信偈」の中の初めの方ですね、釈尊の説かれました、仏言によって、経典によって、信心に生きる本当の五徳、利益ということ、を讃えられておる道なのであります。「攝取心光常照護 已能雖破無明闇」ということは、「能発一念喜愛心」。よく一念喜愛の心を発すればという。この言葉を受けて展開していくわけですね。

一念喜愛の信心ということ、言葉を変えて言えば、一心の真実信心が私たちの上に発（おこ）ると。発（おこ）される時、そこに直ちに煩惱を断ぜずして涅槃を得るという大きなはたらき、徳を得ると。これも大変スケールの大きいね、こんな凄い言葉があるのかというふうな、括目すべき、目を見開いていただかなくてはならんような言葉ですね。煩惱を断たないで、信心をいただくという。大涅槃のはたらきを得るという。

そして凡聖、逆謗、ひとしく回入すれば。凡夫も聖人も五逆の者も、謗法の者も、仏法を謗る者もひとしく回入すれば、自力の心が翻されて、本願のお心に帰入するならば、人生の大きな転換が起こる。そこにあらゆる人々が海に入りて、本願の大海に入って、一味となるような、そういう命の響き合う世界となるのであります。こういう「正信偈」の讃嘆ですね。

こういう言葉をいただきますと、先程大震災のこと、また戦争のことを申しましたけれども、そういうことに出遇って受けた深い傷跡、悲しみというものは、決して他人事ではなくして、人間であるならば、出遇わずにはおれない縁であると。偶然が単なる偶然ではなくして、出遇うところには必然ということがあるのであります。そういう深い怖れというか、問題を抱えておる存在なんだと。そこに出遇うということがたまたま遇う、遇い難くして遇うという、深い喜びとなって、生きてくるということが始まるのであります。

人間の現実生活を透徹してですね、見通された。深い言葉であると思いますね。徹底して見通された。私たちの生活の現実が、自分自身の生身の姿が見通されておるといふ。これが大変大きな大悲ですね。如来の大悲。

人間の目や人間の心には限界があります。相対有限であります。大変生々しい言葉で同床異夢というような言葉がありますが、こういうこともね、やっぱり人間の歴史の中で、深い悲しみとして感じ取ってきたのではないのでしょうか。

例えば夫婦や恋人同士。同床というのは同じく寝屋を一つにして、恋なら恋の、愛なら愛の躍り上がるような喜びがないわけではないでありますけれども。あるわけでありまして。それは本当に出遇っているのかということ、お互いに自分の都合の良い所を感じてですね、良い所取りをしているのではないかと。だから現実の生活になってくると、それが曝露されてくるということがあって。これはリアリティーがあって、リアリズムですね。

そういう人間の抱えておる問題がですね、如来の光に遇うところに、はっきりと自覚されて、そこに生きていく意味を見出していくという真実の信心が起こるといふことは、真に大きな意味があると。人生をはっきりし、自分自身に本当に出遇って生きていくと。そういう意味がある。

「攝取心光常照護」と。摂め取って捨てない、み仏の心、阿弥陀の光ですね。常に私たちを照らし護ってくださいます。攝取の心光。攝取っていうのは阿弥陀仏のはたらきが大悲のお心がですね、摂め取って捨てない。攝取不捨という言葉がありますが。その大悲のお心の光がですね、常に私たちを、信心に目覚めた人を、常に護ってくださいます。

この常という言葉は非常に大事でありまして、照らし護ってくださると。摂取というのは撮め取って捨てない。念仏の衆生ですね。信心に開かれた人に、摂取の阿弥陀大悲の心はですね、光となつてはたらくと。光となつてはたらくということは、どこにはたらくかというならば、衆生の黒闇生死海。真つ暗闇の生死の海ですね。そこに生きる。

黒闇というのは直接的に真つ暗闇ということもありますが、自分は何でも知っている。自分は間違いないと。人智に立って、人間の自力ですね。我が身、我が力、我が心、様々な善根を励むと。それは大丈夫だと思つて執着している。それがまさに黒闇なのです。そういうことが中々わからないとか。少しものを知ると、私は大丈夫だということに立ってしまいますけれども、己を善しとしますが、そして己を善しとするとき、他を悪しとするという。善悪の計らいの中に入ってしまう。人間のその計らいが余りにも深い。黒闇生死海であるという。そこに常に、寝ても覚めても、いうならば二十四時間、照らし護ってくださると。常という。これは非常に大事な意味がありますね。

私たちが生きる中で孤独を感じるといふことがありますね。何で自分だけ一人なのかということがあつて、孤独になると夜が長いということもあるし、色んなことがあります。死んでしまいたくなるということもあるし、人間が信頼できないということもある。教えの言葉というのは本当にリアリティーがあると思ふのです。無明の長夜という、智慧のない、明かりのない長夜。耐え難い夜。

そういう無明の長夜を摂取の心光が、常に照らし護ってくださる。それが光に遇うということですね。光に遇うということは、現在の言葉で言えば、存在の発見ですね。自分という。それまでは世間的な価値観で、自力を中心とした考え方で、自分を計り、人を計っていたけれども、そういう在り方が摂取の心光に照らされる時、なんとまあ存在自身が深い命の歩み、営み、よき人々のおおせ、はたらき。そういったものに支えられて、生かされて生きていたかというそういう発見ですね。

だからそこでは、親たちは何で勝手に産みくさったのかと思つていたものが、出遇ってみるとね、よくぞよくぞご縁をいただいて産んでくださったと。これは倫理的な思い込みじゃなくして、自然に本当にそうだなということが頷かれるようなそういう出遇いですね。

私は無明長夜ということ、人生において実感するといふことが非常に大事な意味があると思ふのです。そこには苦悩の衆生といふことが。「涙と共に貧しい食事を食べる」といふ経験のない人は本当に人生を知っているといえるだろうか。私はそうだと思いますね。涙と共にといふことがあるし、事によつたら食事も喉を通らないといふようなこともあるわけですから。そういう人間が抱えておる本当に深い苦しみ、無明と出遇う時に、その無明の闇が照らされるという喜びは、なんと深いものであるかといふことが言えるかと思ひます。

摂取の心光、そういう摂取の心光は、どれ程孤独であろうとも、孤独存在の一人ひとりの存在を奥底から照らしてやまない。もっと積極的に言えば、孤独の寂しさを知らない人が、本当に友だちに遇う、友に遇う、よき人に遇う、人間の縁をいただくといふことを本当に知っているといえるだろうか。

まあ夫婦といふご縁もですね、あなたに値しないような私であるけれども、よくぞよくぞ一緒になつてくださいましたねと。苦勞かけますねと。こういうふうには言えるならばね、風景が違つてくのではないのでしょうか。どうでしょうか。決して難しいことを言っているのではないと思ふのです。人間がこのご縁をいただいて生きる事実ですね。人間生活の事実といふことは、丁寧に言えば現実の事実ですね。現実の事実は何といふ深い意味があることよといふ。

例えて言えば、今日こうしてお互いに歩いて来られるということも、これは並大抵のことではございません。美味しいお茶をいただいて、美味しいといふこともね、並大抵じゃありません。決して大袈裟な表現ではなくして、本当のことをね、教えてくださるといふことが、摂取の心光に遇

うと。そういう意味があるかと思います。

私はそういう点では、如来の本願内存在であると。孤独に捉われてしまいますとね、自分を外にするのですよ。例外者にする。我々は除外してしまうと。そういうものが人間の心の中には深い闇としてね、蔓延（はびこ）っております。如来の大悲は、摂取の心光は、そういう人間の深い闇に妨げられないと。それを破ると。無明の闇を破るということはそういう意味ですね。そういうことが、人間の上に、一人ひとりの上に、切実にはたらいていると思います。本願内存在である。大悲内存在である。

この「心光常護の益」というのは、親鸞聖人は『教行信証』の中で信心を獲るということにおいて、現生に十種の益を獲るということを信巻に書かれておるのであります。『真宗聖典』の二四〇頁なるのですけれども。この第六番目に「心光常護の益」という。ここで私たちが注目しなければならないのは、現生ですね。この現実の人生において。もっとはっきり言えば、念仏をいただき、信心をいただく、真理に目覚めるということは、今日只今。今ここに生きているこの身に開かれる功德である。はたらきである、恩恵である。そのことをはっきりしなければならないと思います。

もっと具体的に申しますと、今の大変危機に満ちた、慌ただしい欲望追求の中心の世の中で、私たちがこうして明順寺様に集うて、親鸞聖人の教えに耳を傾けることができる。本願のお心に耳を傾ける。聴聞することができる。ここに身を運ばせていただいて、聴聞させていただいておるこの身自身の中に、既にはたらいている。そういう恩徳、五徳であるということを私は忘れてはならないというふうに思いますね。いかがでしょうか。

なんか観念的な立派なことをというそういうことはいくらでも考えられますけど、やはり私は現に今ここにこの身という。この身ということは、身心と書きますけれども。何故そういうことまで徹底されるのかというと、先程申しました、先輩方が言ってきておられます、「朝には紅顔ありて夕べには白骨となれる身なり」と。出る息が入る息を待たず、終わる命だという。命が生きておる事実は、今日只今ということ抜きにすることはできない。そこに今日只今の私自身ということが歌われている。そこに最もリアリティー、生々しい現実の事実に立っておるということを忘れてはならないと思いますね。

私は親鸞聖人という方は本当に深く人間の迷いの深さ、流転の深さを見つめられ、悲しまれた方だと思いますね。親鸞聖人程の方であるならば、底下の凡夫とか、罪悪深重の衆生とか、そういうことを言われなくてもね、内容がお有りになるわけですから。その内容がお有りになるということが本願に遇われたが故にね、底下の凡夫であり、罪悪深重の衆生であり、煩惱熾盛の衆生であるということをはっきりと明らかにしてくださった。虚仮不実の我が身であるということ、はっきりとおっしゃってくださった。大変なことですね。虚仮不実の我が身であるという。こんなことをおっしゃってくださった。

人間は中々そうは言いません。わしの言うことが本当だと。比較相対してね、自分をいつも優位において他を蹴飛ばすとか見下すという立場に立ってしまいます。それは人間の競争社会を生きていくという己中心の自我中心の計らいに立てば、そうならざるを得ないという。人間が生きている、生かされて生きておるという事実をありのままに言えば、親と言われるけれども、親に値する私であろうかと。偉そうな顔をしておるけど、それに値する自分であろうかということ、生きておる事実に立って問われると、親鸞聖人がおっしゃったそういう言葉はですね、本当に尊い言葉であると思いますね。よくぞよくぞおっしゃってくださったと。明らかにしてくださったと。そういうことにおいて私たちは大地に立って生きるということがはっきりするということを教えられます。

常に本願に、阿弥陀に憶念されておる、願われておる命として自分自身を見出すという。これは

孤独に徹して、孤独を受けて、一人なる身を本当に生きるという根本の土台ではないでしょうか。聖人のつねのおおせに、

「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と御述懐そうらいしことを。
(真宗聖典六四〇頁)

そういう人間であることのあらゆる業。生きる苦悩、御恩というものを重ねざるを得ない、そういう私自身を助けよと思い立ってくださった本願のかたじけなさよという言葉がございますが、私は親鸞聖人のその言葉に触れて、自分自身がこの現実の人生に立って生きていくことのできるそういう根本の大地、土台を教えられている。そういう感銘を覚えているのであります。

「正信偈」は親鸞聖人ご自身がお作りになられたお聖教でありますけれども、親鸞聖人がですね、ご自分をご製作なさった「正信偈」について、ご自分で了解を述べておられます。

和朝愚禿釈の親鸞が『正信偈』の文
(真宗聖典五三〇頁)
というようなことですね、述べておられるのであります。それは『尊号真像銘文』という親鸞聖人が八十六歳の時に書かれたものであります。その中に、

「摂取心光常照護」というは、信心をえたる人をば無碍光仏の心光、つねにてらしまもりたまうゆえに、無明のやみはれ、生死のながきよ、すでにあかつきになりぬとしるべしとなり。
(真宗聖典五三二頁)

という言葉があります。『真宗聖典』をお持ちの方は五三二頁の四行目です。「摂取心光常照護」というは、信心をえたる人。信心をいただいた人。信心を獲たといっても如来の真実心が凡夫の上に表れたと。発起した。自分が善い心を起こして、俺は立派な信心を獲たということじゃないのですね。

私は親鸞聖人の教えに遇わなかったならば、どうしても自力の心を励まして、私がいい心境を獲たと言わざるを得ないと思います。それはその方向で一生懸命に誠心誠意努力するならば、いかに身を励まし、心を励まして、素晴らしい心境を獲たと思っても、たちまちに煩惱に荒れ狂う身となるという。そういうことが人間の事実としてありますので、親鸞聖人の悪戦苦闘の中から、如来回向の信心。如来より賜りたる信心ということをはっきりしてくださったという意味がございます。

無碍光仏というのは、阿弥陀仏の心光ですね。無碍光というのは障りがないということです。何ものにも妨げられない。これは阿弥陀ということと同じなのですね。阿弥陀仏を無碍光仏と申しませんが、障りがない。障りがないということは、どのようなことがあっても、そのことに障られないで、むしろ積極的に言えば、それが大事な縁となって、豊かな人生、念仏者の人生、真実の信心に開かれて生きる人生ですね。私の真実ではなくして、私にかけられた真実ということですね。

例えば命ということの一つ捉えてみても、私たちは自分の命というふうにすぐ執着してしまいます。たしかにこの身をいただいた。この命がこれまで生きて来られたということには、量り知れない命の恩恵、命をいただいて生きることなくしては、今の私はないということがはっきりしているわけです。

これは事実です。それを私有化してしまうのです。そこに優越感や劣等感やそういったものに苛まれてしまうということがございます。無碍光仏の心光、阿弥陀の妨げのない光が救い遂げなければ、あなたが助からなければ私は仏とはならない。阿弥陀とはならないというそういう誓いとし

て、つねにてらしまもりたまうと。そこに無明のやみはれ、生死のながきよ、すでにあかつきになりぬ。無明長夜ですね。闇が晴れてですね、あかつきになると。これは凄い言葉ですね。無明の長き夜。あかつきとなる。長い長い夜がですね、日が出て、あかつきとなる。深い感動ですね。

まあ親鸞聖人の歩みで言えば、九歳の時に出家なさって、比叡山で二〇年間の血が出るような苦しい厳しい修行をなさって。そしてそこでは見出せないという深い断念があって、山を下りて、法然上人の元に通われて、本願の教えに初めて遇ったと。そのことは

建仁辛の酉の暦、雑行を棄てて本願に帰す

(真宗聖典三九九頁)

と『教行信証』の後序のところに感動を込めて記されております。

本願に遇うということにおいて長い無明の闇が晴れてね、そこに本当に人生に人々と共に尊い命を生きていくことのできる人生に出遇うことが出来たと。十方衆生に開かれた道ここにありという、そういう感動ですね。

これは親鸞聖人ご自身が、この「正信偈」の言葉についてご自分のお心を述べておられるのであります。大変感動に満ちた言葉であって、それは親鸞聖人の喜びであり、感動であるということに留まらない。また留まらしてはならない。私たち一人ひとりの中で、人生においてそういうことが願われていると。本願に願われておると。よき人にあって、念仏の教えをいただく時、そういうことが自ずと知らされてくると。

和讃の中に

十方微塵世界の

念仏の衆生をみそなわし

撰取してすてざれば

阿弥陀となづけたてまつる

(真宗聖典四八六頁)

という和讃があります。十方微塵世界のということは、細かな塵ばかりの果てしない世界の広がりですね。人間世界は大いなる命の世界から見れば、細かな塵ばかりということが言えるのであります。

同時に私がこの言葉から思うのは、私たちが悩むというときには、小さな細かなことに捉われて悩んでおるといふことがありますね。あんたそんなことで悩んでおるのかということがある。しかし当人からすれば、人に笑われることじゃないし、あんた私のことがわからんからやっていうようなことになるのですが。微塵世界というところには、私は本当に世界の広さ、深さ、闇の深さ。どんなに微小なるものに至るまでもというそういう意味が込められているのではないかといただいておりますもの一人なのですけれども。

念仏の衆生をみそなわしという。みそなわしてくださるということがこれは大変なことです。やっぱり家族の間でもですね、視線を感じなくなるとね、視線がないということが地獄なのですね。無視ということがある。無関心。まあ人間というのは妙なものですね。見つめられるということほどどれ程大きな力があるかわかりませんが。光を感じるといふことは闇の中にこそ光の尊さを感じるということでもあります。光を感じるとき、このあかつきになると。姿が見えてくるわけですね。人が見えてくると。そういうことが「十方微塵世界の 念仏の衆生をみそなわし 撰取してすてざれば 阿弥陀となづけたてまつる」。

この撰取ということは何れも取って捨てない。迎え取るということであって、親鸞聖人の注釈の中

に、「もののにぐるをおわえとる」という。この言葉が私は忘れられないのですが。ものというのは衆生ですね。にぐるというのは逃げるのですね。聞こうとするとところがね、快樂のほうへ快樂のほうへと逃げる。聞いてもね、自分の都合の良い方へ都合の良い方へと逃げるということがある。結局人間は、自分自身は、逃げておる存在だと知らされざるを得ないのです。

にぐるものをおわえとるというこれは非常に実感のこもった表現だと思うのですが。追いかけてね、捕まえる。私たちがよき友達に会う、よき先生に会うというようなことは、そういうにぐるものをおわえとるというようなそういう意味があるのではないのでしょうか。世間的な関心の中に流れおって逃げていこうとする者に対して、逃げていこうとする自身に対して、それでいいのかと。本当に聞くことが待たれているのではないかと。一緒に聞こうじゃないかということで声をかけてくださると。決してね、観念的な夢幻の話じゃないと思いますよ。やっぱり現実に私たち自身の上にもう既にいただいてきておるはたらきではないかと思います。

それからですね、常照、常に照らすということに尽きまして、これは『尊号真像銘文』の中ですが、五二三頁の三行目からであるのですが、

常照は、つねにてらすともうす。つねにというのは、ときをきらわず、日をへだてず、ところをわかず。まことの信心ある人をば、つねにてらしたまうとなり。 (真宗聖典五二三頁)

とき、日、ところをへだてないでですね、つねにまことの信心ある人を選び取るという。非常に人間の現実の生活の上に、はっきりと事実を抑えて言われている言葉であると思いますね。

てらすというのは、かの仏心のおさめとりたまうとなり。仏心光は、すなわち阿弥陀仏の御ころにおさめたまうとするべし。是人は、信心をえたる人なり。 (真宗聖典五二三頁)

これは非常に断片的な捉え方で申し訳ないですが、私たちの生活の現実生活そのものが、とき、ところ、そういうものを選ばず、夜昼を問わず、まことの人間、誰かしと。信心をいただいて目覚めた人生を歩んでくださいということが願われていると。

例えば夢を見ているときでも。歳を取って夢を見ることが多くなったのですがね。恥ずかしながら、忘れることが多いのでありますが。なんであんな夢を見たのだろうかと考えさせられることがあります。別に夢判断をするわけじゃございませんけれども、人間がこの私自身の中に生きている命の果て知れない深さ、広さ、闇の深さということが例えば夢を見るということにおいても、知らされるという感じがしますね。

これは親鸞聖人が源信僧都のことを讃えられた中に、

極重の悪人は、ただ仏を称すべし。我また、かの摂取の中にあれども、煩惱、眼を障えて見たてまつらずといえども、大悲倦きことなく、常に我を照らしたまう、といえり。

(真宗聖典二〇七頁)

「正信偈」の中に歌われている有名な言葉がありますけれども。煩惱に眼を障えられて、摂取の光明は見えないけれども、大悲倦きことなくして常に我が身を照らすという。そういう、はたらきというものをいただいておると。そういうことが次のですね、

すでによく無明の闇を破すといえども、貪愛・瞋憎の雲霧、常に真実信心の天に覆えり。た

たとえば、日光の雲霧に覆わるれども、雲霧の下、明らかにして闇きことなきがごとし。

(真宗聖典二〇四頁)

一番根本でありますこの摂取の心光に常に護られているという。無明の闇が破られてですね、如来の
大悲に生きるというそういう道が開かれるとき、無明の闇を破るという、これはかけがえのない
事実です。そういうかけがえのない事実をいただくといえどもという。これが大事な言葉ですね。
いえども貪愛・瞋憎の雲霧、常に真実信心の天に覆えり。貪愛ということは貪り愛するという。瞋
憎ということは怒り憎しむという。人間の欲望が満たされないと、怒りにきする。そういう雲霧が、
真実信心の天を常に覆うという。そういう人間の生身の現実ということを、はっきりと教えてくだ
さる。同時にですね、いえどもということが重なっておるわけですね。

すでに無明の闇を破すといえども。まことの道に出遇ったという大きな道が開かれたといえども、
貪愛・瞋憎の雲霧、常に真実信心の天を覆えりと。人間の貪愛・瞋憎の雲霧、雲霧が非常に深いと
いう。そういう悲しみですね。それは例えば日光の雲霧に覆わるれども、雲霧の下、明らかにして
闇きことなきがごとしと。これは大変な言葉ですね。煩惱、妄念、貪愛・瞋憎の霧に覆われるとい
うことがあると。人間を悩まし悲しませるということがあるけれども、本願念仏に遇い、無明の闇
を破するという、そういう大いなる仏道に出遇うということはですね、日光が雲霧に覆われても雲
霧の下は明らかにして闇きことなきがごとしと。人間の貪愛・瞋憎がですね、人間を決定的に駄目
にするそういうものじゃなくして、明らかにして闇きことなきがごとしという、人間の生活を本当
に照らし続けていく。言葉を変えて言えば、貪愛・瞋憎の渦巻く、そういう現実の生活を本当に生
きていくことができるという、そういう道が開かれておるということを讃えられておると思いま
す。

「已能雖破無明闇」からの言葉に尽きましては超特急で走りまわりましたが、「摂取心光常照護」
っていうところから自ずから展開してくるそういう大信心のはたらきというものが現実の人間生
活の貪愛・瞋憎、貪り愛す、怒り憎しむ、無明の闇というものを妨げないで現実の人生を徹底的に
照らし、護り、養い、育み育てていくという大いなる五徳が讃えられていると思います。

時間がちょっと長くなりましたが、一応は話の方はこれで終わらせていただきまして、後は少し
でも座談の時間があればと思ひまして、ここで一応終わらせていただきます。どうもご清聴ありが
とうございました。